

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<書評と紹介> 長谷川裕編著『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難：低所得者集住地域の実態調査から』

著者	吉中 季子
出版者	法政大学大原社会問題研究所
雑誌名	大原社会問題研究所雑誌
巻	683・684
ページ	87-89
発行年	2015-10-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/11794

書 評 と 紹 介

長谷川 裕編著

『格差社会における家族の生活・ 子育て・教育と新たな困難』

——低所得者集住地域の実態調査から』

評者：吉中 季子

本書は、約20年前に行われた公営住宅団地を対象とした調査の結果をもとに、再び調査し、今日の生活困難層の生活と子育て・教育の様相を、あらためて明らかにしようとしているものである。前回の調査は、1989年から1992年に行われ、バブル経済期の陰に隠れた「貧困」の存在と、それらに置き去りにされた人々の現実の生活様相を浮き彫りにした研究であった。前回の調査の結果は『豊かさの底辺に生きる一学校システムと弱者の再生産』（久富善之編著、1993年）にまとめられている。それを踏まえた新規調査は、2009年から2011年に実施され、同地域の20年の時間的経過を経たダイナミックな調査であった。貧困という言葉とそれに伴うスティグマが、今日にどのように影響し、変化を与えているのか、研究目的を読むだけで興味深く感じる。

本書の構成と概要は以下のとおりである。第1章では、今日的な格差と貧困のなかでの子育て・教育の動向と課題を網羅的に整理し、本研究のテーマと方法を示している。第2章では、調査の対象となったA団地の地域特性と住民の変化をとらえている。そこには20年前より入居倍率が上

がり団地需要の高まりがみられること、世帯人数の減少がみられるものの移動は穏やかになったこと、それにより団地の社会的な位置づけは、よりよい住宅へ移るためのスプリングボードとしての役割からセーフティネットへと変化したことを述べている。さらに、A団地には低所得者層が多いということが常態化しているが、「豊かさの底辺」という言葉自体が今日的にはリアリティを持たず、意味が異なってしまっていると述べる。

それらを踏まえて第3章では、格差社会が露呈し、企業社会が崩壊したなかで、子育て世代が形成するネットワークの特質について、具体的な事例とともに検討している。団地内はかつてより、社会的な繋がりが弱まり生活が個人化・流動化している様子、特に自治組織や子育て支援組織などのネットワークが衰退していること、それに伴いコミュニティへの担い手の意識が薄れ、批判的であった「うわさの階層構造」も薄れていったことがあった。そのなかで、個別に「ママ友」の形成や、「出戻り」「呼び寄せ」など親族ネットワークに頼る層の存在も一定数確認でき、より個別でインフォーマルな関係への依存に変化していることを指摘する。

ついで第4章では、子育てと教育について、家庭・親・教師のそれぞれから分析がなされる。親や家庭の教育方針においては、かつてみられた高学歴の獲得が競争社会を生き抜く「ストラテジー」であるとの感覚は薄れ、子ども自身の「自主性を尊重する」というかたちの学習期待が広がった。そうしたなか、最低限の必須資格が高校卒業であるとの認識が共通とされていた。しかし、大学進学については一定の層に、奨学金・就職難がときに経済的な負担としてのしかかるといった意識があるなかで、一方、大学進学しないことがリスク

であるとする層も存在しているなど、親の感覚の違いを指摘した。教師の意識においては、当該団地は経済的困難層が多いという認識はあるものの、教師が子どもを「他者化」することで、一定の客観性を持った関係となっていることを述べている。

以上の内容からみても本書は、全体を通して語りを丁寧に扱った質的研究であり、住民である被調査者のライフヒストリー、奥行きをもった時間軸から経た現在の生活実態が、リアリティのある語りをもって綴られた点に面白さがある。研究方法としても、20年前の聞き取りケースを可能な限り追跡し、再び聞き取りを実施しているところにこの調査の醍醐味があるといえよう。以上を踏まえて若干の気づきを述べたい。

20年前の調査もそうであるが、本研究は、「団地」という地域社会を対象としていることが読手の興味を引く。地域社会といえ、ある一定規模の面積を伴い、ひとや資源が広域に行き交いながら築かれるものであるが、団地は凝集性のある空間コミュニティであり、いわば棟や部屋を行き交うなかで人々の暮らしがある。そのことは、第3章6節『「団地暮らし」の意味・資源としての団地』のなかで、その様相が描かれている。団地への入居は、子育て・教育戦略として、あるいは生き抜くための資源を得るための「団地の有効利用」として選択されていた。しかしながら、団地暮らしを「否定的」とする調査結果や、第1章にある、団地はセーフティネットの役割に変化しつつあるとの記述には、著者や住民の背後意識に、「団地」にはできれば住みたくないというネガティブな前提の上に語られているようにも思える。それは、それに続く節を「住めば都」と題している点や、住民がそうしたなかでも利点を見出そうとしながら暮らしていることから推測できる (p.208)。

そうしたなか、団地内組織は前回調査よりも低迷しつつあり、住民は社会的な組織よりも、私的かつ個人化する傾向になり、家族への繋がりに依

存を求めるようになる。そのことを検討している、第3章4節「A団地居住者におけるネットワークの変化をめぐって」における追跡の調査は、当然ながら研究の視点としては大変興味深い。さらにそのなかで、「10年ぐらい前から結婚や就職で一度団地を出て行った者が団地に戻ってくる傾向がある」(p.155)との指摘がある。それは、前提として家族依存が強固であることに加え、それぞれの事例を通して、社会的資源に依存できずに親や家族に頼らざるを得ない事例が増えてきているとする。また、「子どもが学卒後も継続して同居」せざるを得ない事例は、より選択の余地のない生活に追い込まれていることを予測させる。筆者はここで、周辺からの凝集性をもって社会的排除の一形態として、世代的再生産が固定化されつつあるとの仮説を立て、検証の必要性を課題提起する。それには、経済的要因による世代的再生産だけの視点でなく、昨今の家族主義への回帰、地理的利便性、何よりも住み馴れた空間への愛着というものが大きいと推測できるが、そのあたりも踏まえた再検証が必要であろう。また、家族や知人などのインフォーマルな資源のもとに引き寄せられる傾向があった。さらに深く探求するためには、地域社会、団地、コミュニティ、家族という、個人が関係する領域の範囲が小さなものへと移行していく、一連の分析ツールに沿った整理があると、それぞれの利点・欠点が導かれるのではないだろうか。

また、このような自治会などのコミュニティの希薄化と地域組織の弱体化が確認される一方で、生活保護受給のきっかけが結果として「ママ友」を形成できるようになったという事例が紹介されている (p.184)。特殊な一例に過ぎないかもしれないが、かつてつくられた「うわさの階層構造」によって、他人の目やうわさを気にし、無意識に行動抑制をしていたものが弱まったのではないかと思われる。その影響のひとつとして生活保護受給のスティグマからの解放があったのではないだ

ろうか。社会資源のネットワークの弱体化と、住民がこれまで「うわさの階層構造」の内側にいた状況から解放された影響と推測でき、20年間の変化のひとつとして、非常に興味深い事例である。

全体的な読後感としてやや違和感があるのは、ひとつの枠組みとして生活困難層かそうでない安定層という違いで検討が行われていたことである。ある事項に対して、聞き取りの結果を肯定的か否定的かに分けて分析や検証を行っているところが随所にみられたが、ひとつの評価については常に表裏性を伴うものであり、困難層については否定的な結果で、安定層は肯定的というやや誤解を与えるような導き方をしているように思えるのである。特に第3、4章において、両親家庭と母子等家族というカテゴリーでの分析の比較がなされているため、必然的に母子世帯の劣位の実態のみが強調されたような記述にならざるを得ない。当初の分析枠組みとして、昨今の母子世帯の置かれている状況や、制度や資源の欠如、その結果として母子世帯が脆弱になるとの説明と、世帯類型別で検証することの意味付けの説明がほしいところである。さもなければ、貧困に陥る結果を招くのは、家族構成に問題があり母子世帯になった本人に原因があると読み間違えかねないのではないだろうか。

さらに、著者の総括に「競争コミットメント型」から「貧困の文化」へ移行してきているのではないかと指摘がある。この調査でみられた今日的な貧困の文化とは、「将来を見通して生きるのではなく、現在の利他的によろこびを得て、(中略) 相互扶助の関係を つくることで暮らしを成り立たせ、自己確証の拠りどころをおく」(p.382) とある。この点についても、なぜ将来を見通せないのか、利他的に生きるのか、または生きざるを得ないのか、という議論なしに、今ある貧困の実態からのみで貧困の様相を語るのとは、拙速な結論付けという印象を受けないでもない。「貧困の文化」については、時代の様相の変化に伴い「貧困とは何か」という視点も必要である。著者らの20

年前の調査時にもおそらく対応の貧困の文化は存在していたと思われる。第3章での丁寧な聞き取りの言葉から、団地生活や文化の側面が語られていた。そのあたりを踏まえつつ、貧困の文化の検討ができたのではないかとやや物足りなさを感じる。

今後の課題として期待したいのは、本研究の聞き取りはランダムサンプリングにより抽出し依頼した対象者の3割程度とのものであった。聞き取りに応じた対象者は、本書でタイプ分けされている「生活困難層」だったとしても、インフォーマルにせよママ友や親類などのネットワークを利用している人も多く、当事者たちの貧困観といった意識の中では、決して貧困ではないことが予測される。むしろ、聞き取りを拒否した対象者に、さらに不可視な問題が潜んでいる可能性が容易に想像できる。そういう意味でも、先に述べた「団地」「母子家庭」に從來からまつわりつく固定概念もいったん取り払ったうえで、当事者の貧困観や貧困文化からの検討が加わると、タイトルにある「新たな困難」がより明確になったのかもしれない。

ともあれ、団地という集合住宅は、時代の変遷とともに人々の暮らしぶりが凝集される居住空間であろう。今日的には子どもの貧困、教育、若年の雇用の問題が折り重なって語られるが、これらのことは制度や生活実態の結果として表出されるものであるため、単純に理由が帰結されるものでもなく、自己責任に至るものでもない。繰り返しになるが、貧困問題を取り上げ、時間をかけたインタビューを実施した追跡調査は他にあまり例がなく、貴重な研究成果であることは言うまでもない。だからこそ、いくつかの今後の期待を述べさせていただいた。さらに欲を言えば、今から20年後の調査の実施も強く願うのである。

(長谷川裕編著『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難——低所得者集住地域の実態調査から』旬報社、2014年2月、387頁、定価9,000円＋税)

(よしなか・としこ 名寄市立大学保健福祉学部准教授)